

# 写真は撮る人の 心や感動が写る



フォトグラファー

くま ぞえ じょう  
**熊副 穰**さん  
Jo Kumazoe



甌島のナポレオン岩。熊副さん撮影。

鹿児島でフリーのフォトグラファーとして活動している熊副穰さんは、就職して社会に出るまで写真への興味はあまりなかったと語る。就職先の職場でカメラを渡され、仕事としていろいろな写真を撮るうちにカメラに興味を持つようになり、プロになりたいという夢を持ち始めたという。

その後、職場を退職したのが35年ほど前。それから地道に経験と実績を積み重ね、14年ほど前に日本写真家協会に登録。プロとして事務所を構えフォトグラファーを名乗るようになった。現在は自らの写真活動に加え、全部で十カ所ほどの写真グループや写真教室の指導も行っている。

また、その活躍は写真活動のみにとどまらず、県写真協会会長や県文化協会副会長、NPO法人副理事長、鹿児島市景観まちづくり委員会委員など、幅広く役職を兼任し多忙を極めている。そのことに触れると「頼まれるとなかなか断れなくて。何をやっているのか自分でもよく分からない。一貫しない人生です」と笑う熊副さんに写真の魅力や鹿児島の風景について語ってもらった。

# 景観にはその地域の文化が大切



熊副さん撮影の田園風景。

## どんな写真を

私が撮りたい写真は主に社会的な問題、いわゆるドキュメンタリーなんです。例えば有明海の干潟の問題とか川辺川ダム工事に伴う五木村の問題など、何年もかけて追いかけていて、そのテーマで個展を開くこともあります。

私にとって一番興味があるのは人なんです。その人が置かれた環境や事情によってどう生活が変化し、どういう行動を取るのか。その表情は人さまざまで、価値観や判断基準は人によって全然違います。

## 撮影には苦勞も多いのでは

確かに写真の場合、一枚撮るのに何時間もかけたりして、端から見るとすごく大変に見えることもあると思います。しかし、やっている本人は好きなことを楽しみながらやっているのです、あまり苦勞とかは感じません。

ただ怖い思いをすることはあります。パプアニューギニアで原住民族を訪ねたときに、鳥の羽で着飾って弓矢と山刀をもった格好の被写体になる男性がいたので、撮影しようとして望遠の付いたカメラを向けたら逆に弓矢で狙われてしまつて、その時は慌ててカメラを離して両手を挙げました。

## 海外でも撮影されるのですか

数年に1度ですが時間とお金ができれば写真仲間と撮影に出かけます。海外はなかなか行けないので、私が最終的に行き先を絞るとすればどうしても開発途上国になるんです。私の中で文明とは何だろうという根本的なテーマみたいなものがあって、あまり文明化されていない所での人間の暮らしを見てみたいという思いが強いのです。そんな所に行くとは最初は不衛生だと思ふし、生活上の不便をいろいろと感じるのですが、数日そこに居ると逆にうらやましくなつてきます。

そこで生活している人たちは、豊かな自

然と溶け合うように共存していて、横から見ていると実におおらかにのびのびと生きていくんです。そんな中で自分の生活を振り返ると、時間に追われ、支払いの心配をしながらきゅうきゅうとした生活をしている。文明は本当に人を幸せにしているのか、そんな疑問を投げかけてきます。

## 写真家として見た鹿児島県の風景は

吉野の寺山展望台から望む錦江湾と桜島は素晴らしい眺めですね。それと霧島市の亀割峠の上のドライブインからの眺めや根占町の海岸辺りから見た開聞岳など、こちらは夕日がとてもきれいですよ。それと私はどこにでもあるような田舎の田園風景が大好きで、よく車で出かけるんです。ただ最近気になるのは、手入れされていない杉山や休耕田が目立つこと。少子高齢化の一つの影響でしょうか、これが寂しい光景ですね。

それと鹿児島市の「景観まちづくり委員会」の委員をしていることもあって景観についても関心があるのですが、私が考える景観は地域の文化そのものだということです。景観が議論されるときには自然の風景や建物などの街づくりがよく話されます。もちろんそれが必要ですが、それだけでは寂しいと思うのです。その土地に息づく人々の暮らしや昔から伝わる風土など、そこで育まれてきた文化や地域らしさを大事にしていくことが景観を考える上で重要だと思います。

## 写真の魅力はどこに

撮った人の心、感動が写真の中に出ることだと思います。技術や知識だけではいい写真は撮れません。まずは自身の感受性を豊かにして、自分が感動する被写体に出会うこと、見つけることが大切です。例えばいつも通る道ばたで、コンクリートの割れ目に咲いているスマレを見つけたときに、何も感じなければそこまでです。それを見て、すごいなと感心して心を動かされるから写真に撮ろうと考えるし、いい写真を撮ろうと努力するんです。その結果、撮った人の心、気持ち、感動が見る側につながる。それが写真の魅力だと思います。



パプアニューギニアの原住民族。右下でカメラを構えるのが熊副さん。